

表紙 の 説明

駿府城 (徳川家康の大御所政治の舞台となった城)について



今月の表紙は、移動計測車両による測量システム(MMS)から作成した駿府城(東御門、巽櫓)のレーザ点群画像です(Riegl VQ-250を使用)。上段図はレーザ点群から高さにより色分けしたカラー画像です。下段右図は反射強度点群の正射投影画像で、下段左の2図と比較することで、水堀と東御門や東御門橋、巽櫓の平面的な位置関係がよく分かります。計測車が走行した道路と城壁との距離は約30m以上ありますが、レーザ点群からだけでも櫓の層数などの様子が確認できます。

■表紙画像のご提供先

「MMSから作成した駿府城(東御門・巽櫓)」

アジア航測株式会社

〒215-0004 神奈川県川崎市麻生区万福寺1-2-2

新百合トウエンティワン2F 営業推進部

Tel: 044-969-7549

使用機器: RIEGL社製 VQ-250

「駿府城巽櫓と東御門」—— 瀬戸島 政博(筆者)

駿府(駿河府中)は、14世紀に室町幕府の駿河守護であった今川氏の居館(今川館)が築かれ、今川氏の支配領国の中心地となりました。徳川家康も少年期には人質として今川館で過ごしました。

今川氏滅亡後は、武田氏の領国となりますが、武田氏も織田信長に滅ぼされ、家康の領国となり、新たな本拠地として駿府城築城に着手しました。しかし、家康は天正18(1590)年の小田原北条氏攻めの後、関東へ移封(国替え)となり、中村一氏が城主となりました。

その後、慶長5(1600)年の関ヶ原の戦い、慶長8(1603)年の江戸開府を経て、家康は慶長12(1607)年に大御所として三度駿府に入りました。天下普請として全国の諸大名に助役を命じ、天正期の城域を拡張修築させ、大御所の城として相応しい壮大な駿府城を構築しました。三重の堀を廻らせ、堀に四囲された曲輪は、本丸を中心に、二ノ丸、三ノ丸へと広がる輪郭式の縄張としました。

駿府城は家康の晩年(死去までの10年間)の大御所政治の舞台となり、家康没後は徳川頼宣、徳川忠長が居城とし、その後は幕府領として城代が置かれました。

城内には、中堀・外堀とその石垣が現存し、平成元(1989)年に巽櫓が復元され(図-1)、平成8(1996)年には二ノ丸東御門が復元されました(図-2)。三ノ丸と城下を仕切る三ノ丸堀(外堀)は、城西から城北部に連続して現存し、

城南部にも一部現存しています。三ノ丸には静岡県庁をはじめとする公共施設が並び、クランクした道路から大手御門跡や四足御門跡、草深御門跡など思い描く以外は往時の駿河城の姿を留めていません。

二ノ丸と三ノ丸を仕切る二ノ丸堀(中堀)は二ノ丸の四囲にわたって現存しています。中堀沿いには二ノ丸と喰違御門跡、西門橋と清水御門跡、北門橋と北御門跡、東御門と復元された巽櫓・東御門が見られます。巽櫓(図-1)は、二ノ丸東南隅にある三層二重の隅櫓で、寛永15(1638)年に再建された際の詳細な記録が発見され、平成元(1989)年にかつての姿に忠実に復元されました。また、二ノ丸東御門(図-2)は、二ノ丸正面入口に当たる門で、高麗門、櫓門、南および西の多聞櫓で構成される榊形門です。石落とし、鉄砲狭間、矢狭間などを備えた実戦的な門で戦国時代の面影を残しています。

二ノ丸には北端と西端の一部に高い土塁が残り、東側には家康が在城したとされる御殿跡(現在は庭園)や本丸堀と二ノ丸堀を繋いでいた水路(図-3)などが残っています。二ノ丸の西側は西ノ丸となっていたようで、さらに南西隅には坤櫓跡の石垣が残っています。

二ノ丸と本丸は本丸堀で仕切られていましたが明治期に埋められ、現在は発掘で確認された堀の一部以外は見ることはできません。本丸の御殿(本丸御殿)には家康が住み、没後は将軍宿泊所とされ、明

治時代に取り壊されました。現在、本丸御殿跡には図-4のような家康像が建てられています。

また、本丸の北西隅に天守があったようで、天正期、慶長期に二回の計三度建てられたようです。

徳川家康が隠居し、大御所として二元政治を展開した時代、駿府城下は江戸に匹敵する繁栄と発展をみせ、大御所参りに詣でる大名たちの畏敬の象徴が駿府城でした。(瀬戸島 政博)



図-1
復元された
巽櫓
(筆者撮影)



図-2
復元された
東御門と多
聞櫓
(筆者撮影)



図-3
二ノ丸水路
(筆者撮影)



図-4
本丸跡に建つ家康像
(筆者撮影)

表紙 の 説明

【番外】 月刊『測量』の表紙に登場できなかった城たち(城供養)

平成24(2012)年の月刊『測量』の表紙は「城」をテーマにしました。いかがだったでしょうか。「城」をテーマとした理由は、日本中が東日本大震災直後のショックに打ち沈んでいた時期、復興への強い決意に加え、癒やし・安らぎなどを私たちは求めていました。悠久とした歴史の中で風雪に耐え、凜として今なおその雄姿を残す「城」は、日本人の叡智と工夫の結晶であるとともに、私たちに自信と勇気を与えてくれます。そのような背景から、今年の月刊『測量』の表紙を「城」で飾ることが昨秋の編集委員会で決まりました。

月刊『測量』の表紙ですので単に「城郭」の写真を載せるのではなく、“空間情報技術でとらえた城”をコンセプトにしました。当然のことながら、全国の城郭を紹介することはできず、表紙に登場できなかった城がたくさんあります。今年の締め括りとして表紙に登場できなかった城の一部を紹介します。

■城の定番「姫路城」が登場していない!

城と言えば白鷺城と別称される「姫路城」が最初に思い浮かびますが、本誌表紙には登場しませんでした。姫路城は現在、大修復中であり、図-1のように大天守には巨大な覆いが施されています。平成21(2009)年10月に大天守の保存修理工事を開始し、平成27(2015)の春頃には大天守を含む天守群の優美な姿を見ることができます(図-2)。

「姫路城」は現存する12天守の一つです。現存12天守のうち「姫路城」に代わり、2月号では「松本城」、4月号には「弘前城」が登場しました。これ以外で紹介できませんでしたが、「丸岡城」(福井県)、

「犬山城」(愛知県、図-3)、「彦根城」(滋賀県)、「備中松山城」(岡山県、図-4)、「松江城」(島根県)、「丸亀城」(香川県、図-5)、「伊予松山城」(愛媛県)、「宇和島城」(愛媛県)、「高知城」(高知県、図-6)があります。

■中世五大山城も登場させたかったが…

城=天守と考えられる読者も多いと思いますが、天守は城の一部で、私たちが眼にするような立派な天守は近世に構築されたものです。中世~戦国期に活躍した城の殆どが山城でした。数多い山城のなかでも有名なものが中世五大山城です。上杉謙信の居城であった「春日山城」(新潟県)をはじめ、能登「七尾城」(石川県、図-7)、近江「観音寺城」,「小谷城」(共に滋賀県)、出雲「月山富田城」(島根県、図-8)です。これらの山城は全山が人工的に削平され、無数の曲輪が造られ、土塁・空堀・切岸などで敵からの侵入を防御していました。近世の城とは全く異なるイメージの城です。

■近世三大山城も有名だが…

中世から戦国の世に活躍した山城も時とともに平山城や平城へと移りましたが、平和な江戸時代にも立派な石垣や天守を持つ近世山城として使われた城があります。前掲の「備中松山城」(図-4)、「岩村城」(岐阜県)、「高取城」(奈良県)は石垣の壮さ、虎口の巧緻さなどから“近世三大山城”と呼ばれています。岩村城と高取城は表紙に登場できませんでした。

■武田館の他にも名族の居館があるが…

本誌11月号表紙には、甲斐源氏の名門武田氏の居館であった「躰躰ヶ崎館(武田館)」を登場させまし



図-1 大修復中の姫路城



図-2 大修復前の姫路城



図-3 国宝犬山城



図-4 備中松山城



図-5 丸亀城



図-6 高知城



図-7 能登七尾城



図-8 月山富田城



図-9 一乗谷朝倉氏館



図-10 大内氏館



図-11 吉川元春館



図-12 常陸小田城

たが、これ以外にも名族の居館が数多くあります。例えば図-9は、越前の名門朝倉氏の百年の栄華を今に伝える「一乗谷朝倉氏館」(福井県)です。図-10は、室町～戦国時代に中国地方に覇をとこなえた大内氏の居館跡である「大内氏館」(山口県)です。また、図-11は安芸毛利氏を小早川氏と共に支え、毛利両川と称された吉川氏の居館である「吉川元春館」(広島県)です。さらに、図-12は南朝方の北畠親房が『神皇正統記』を著した関東の名門小田氏の城館であった「常陸小田城」です。

■伝統工法による復元天守もあるが…

城絵図や古写真などの史料に基づき、当時の技法により忠実に復元された木造の復元天守は、城郭の優美さに加えて、伝統的建築工法が学べる空間となります。代表的な復元天守として、「大洲城」(愛媛県、図-13～14)、「掛川城」(静岡県、図-15)、「白河小峰城」(福島県、図-16)、「白石城」(宮城県)などが挙げられます。

これ以外にもコンクリート造りですが、外観のみをかつての天守の姿に近づけようとして建てられた外観復元天守があり、本誌6月号の大坂城、7月号の名古屋城、9月号の広島城、他に岡山城など数多くあります。

■高石垣が残る城もあるが…

本誌3月号表紙を飾った熊本城の扇の勾配の高石垣は有名ですが、これ以外にもタイプの異なる高石垣があります。例えば、図-17は藤堂高虎による直線的な高石垣が残る「伊賀上野城」(三重県)です。また、図-18は延岡城(宮崎県)に残る“千人殺しの石垣”と伝承される高石垣です。これら以外にも津和野城(山口県)、丸亀城(香川県、前掲図-5)なども有名です。

■首里城以外のグスク(城)もあるが…

沖縄や奄美諸島では「城」と書い

て「グスク」と読みます。中国文化の影響を強く受けて築かれた部分が多く残っています。南北朝時代に既に総石垣で築かれたグスクが多くあります。居館を中心に石垣で囲まれ、軍事拠点として外敵から身を守るため、さらには聖地として造られました。2000年には、本誌8月号表紙に登場した「首里城」に加えて、「今帰仁城」(図-19～20)、「勝連城」(図-21)、「中城」(図-22)、「座喜味城」などが“琉球王国のグスク及び関連遺産群”として世界遺産に登録されました。

■最後に、忘れ去られた城にも光を…

忘れ去られた古城・廃城には“兵どもが夢の跡”といった寂寥感が込み上げてきます。このような忘れ去られた城たちにも光を当てたいものです。例えば、図-23は備前国の戦国の梟雄宇喜多直家の出世第一歩の山城であった「乙井城」(岡山県)、図-24は主家尼子氏再興のために忠臣山中鹿介が活躍した「上月城」(兵庫県)、図-25は寛永14(1637)年鳥原の乱の舞台となった肥前「原城」(長崎県)、図-26は本誌1月号表紙に登場した五稜郭よりも小規模ですが、幕末に造られた同じタイプの星形稜堡を持つ「龍岡五稜郭」(長野県)です。

山城を巡っていると、本丸(本郭)のどこかの隅に置かれた三角点を見ることがよくあります。風雪に耐え、凜として、使命を果たしている姿には感動さえ覚えます。そのような『城と三角点』をテーマとして、今後、紹介できる機会があれば幸いと思っています。

なお、今年の月刊『測量』表紙の「城」シリーズでは、リーグルジャパン(株)、アジア航測(株)、朝日航洋(株)、国際航業(株)、中日本航空(株)、(株)パスコ、五稜郭タワー(株)、兵庫県和田山町観光協会、河野隆氏から、画像等をご提供いただき、深く感謝申し上げます。

(日本測量協会 瀬戸島政博)



図-13 大洲城の復元天守



図-14 大洲城復元天守の内部



図-15 掛川城の復元天守



図-16 白河小峰城の復元天守

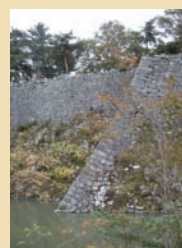


図-17 直線の高石垣(伊賀上野城)



図-18 千人殺しの高石垣(延岡城)



図-19 今帰仁城



図-20 今帰仁城平郎門



図-21 勝連城



図-22 中城

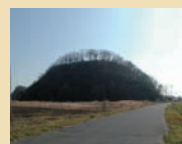


図-23 乙井城



図-24 上月城



図-25 原城



図-25 龍岡五稜郭